報仇
繪本四季物語

前篇 三

913.5
エ
前編 3

報仇四季物語前編巻之三

東都　振鷺亭主人著

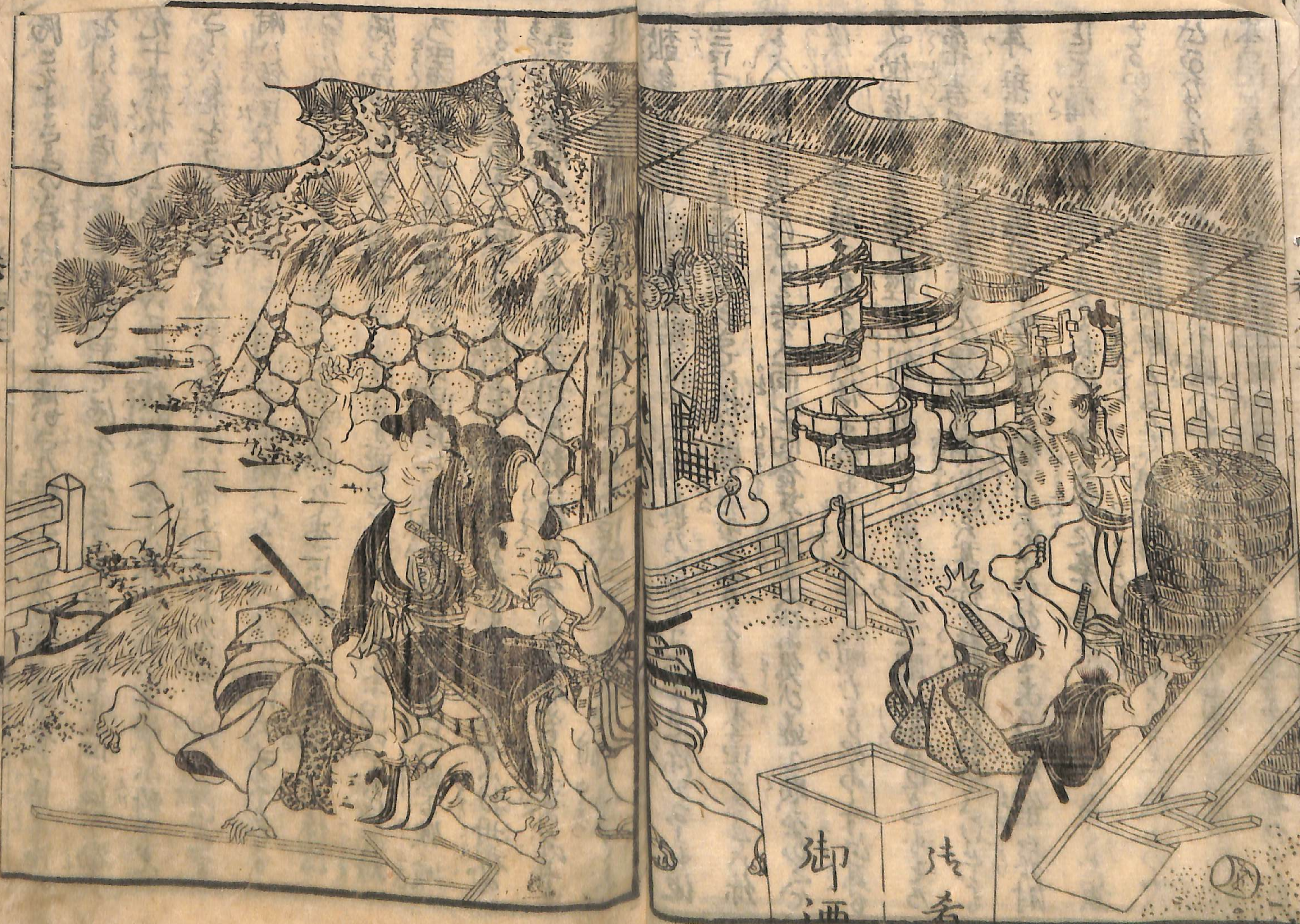
第五齣

美女好男拙奇しく義を完す
痴人酔漢縡趣して笑状獻を

此時弾二ハ一桶の水を飲て酒の酔忽ち醒けれバ大ひに驚きて走り出るを酒店の主急ぎ呼とゞむるハ客いまだ一樽の酒乃償を與ずして何處へ走給ふやと弾二答て云けるハ價ハ渠ら二人より出さるべし某ハ今急ぐ用ありとてこゝを立去らんとする主ハ地上に倒れたる張三李四を呼活るに李四漸く心づきし処に張三も惘然として起上り李四に向ひて云けるハ余ハ大かたに打負て身ハ半途に迷ひ痛み李四が云余も

又鳥珠遊出しなばさこそ痛つらん張三が云些とも痛しからず李旦が云
我も又いさゝか痛しからず張三と李旦皆々不審して云伱鼻歪く痛ぜ
とりふハ何の事ぞや李旦が云伱も又鳥珠遊出て痛どとふも乃救いるか
張三呵々と大ひに咲て云我元来一眼にして一眼ハ咤眼なりよりて瞼眼と
見しハまつ鼠縺の珠を以て睛と作しをれに入おきて瞞明なるやうに
見せ侍るなる也ハ鼠縺乃珠一粿失ふたりとも何条慥ふんやうで耻べきハ
某か巴鼓にふらく執心して瘡を病よりて結毒眼に入て遂に一眼を
潰す伱兗賢人に沙汰する事なき李旦と皆々浮て身を悔て云甚
妙なり我もまたさる卅の昔になれそ免て終にをる髪をさい出かで忽め
於て瘡毒となりて鼻茎を失ひたり某上てを乃おのとたずそと云へども
赤中を服のお乃と見て此の如く折頞となり好色のかをあことを悔さ某

数鼻を精工にて瘢痕に貼たが天晴眞乃鼻とりえるものぞ伱かわらぞ他
言する事なかれ張三が云さてハ伱ハ貼鼻ふておのろよるる李旦が云さてハ伱
をへ眼ふて二つの清るかと共に両を向合せて互に大ひに笑ひ遂に脉をかくて
絛側ありさて張三云るハ我伱に答あり某有ぜきハ眼だろれにあらず此耳も
又傲造耳なり強て軽粉剤の劇方を用ひ終に一眼ハ救ひたれどもその
薬毒耳へ出て遂に左右の耳腐爛せしが其伱が精工にハ及びかけれども
耳垂珠よく造りしにてかくのごとく貼耳となし孩子にまで乃ど嫁界泉附
して痛を或ハ癢しそろおいてつらく恋るに主をばすて鼻も剝るくぞ思
てるかくてハ聾耳肝眼瞎鼿となりて我両相変化のかくなる顔といふハ
此るなり伱その鼻を我に與へんやその價にて且酒を買て飡あ[illegible]
李旦が云さて我鼻ハ鼻缺地差菻の御他なりといへども人ハ鼻なくとも


御酒

酒こそまゐらせいざや你が所望に應ぜんと張三と王成はかく大に喜び即ち李巳
を引て酒店に入り凳の上に坐せしめやがて酒をあつらへて大碗を以て李巳に酒を勸
め十餘杯ほど飲ませけれバ即ち催促て云けるハ你をもやしき酒ども酔させん
さらバ飯を食すべしと李巳が云ぞ我酒ハ攪子酒量と名付て飲ば升つめざる
時ハ飽足ず又熱酒とも譯ひて飲時ハいよく飲て尚大々まとなる
なり你持追來のよ張三又酒を盛めて李巳に酬をとそ餘て云你此
酒を飲りとして多く貨物ならずとも買あるべからんハおとども李巳咲て云你両箇
乃雲話を具るに何ぞ推直る事の俾ハ快美や佳味やそ只顧に飲喰
するが酒店の主に向て又何の肉ありや肴に出せと云けれバ主が云ふ今ハ牡丹桜の
美味など類肉はあれども今ハ隠家の剥肉數ハ絶りたずとも此肴出に叓の若人と
して三分酒を飲まぬ心なりとて中にも李巳是ておまへて大に叫で罵りて云

你我を侮り憚んずると覚へ肉なくバ何とぞ外の肴を持來よかゝる時ハこの
店を微塵に踏砕して立地に後悔をさせめん主是を聞て李巳が狂ひ出さん
事を恐れつ甲香二三隻に蒜泥を添て出しけるを李巳又飽まで吃ひ肴半隻を
して褌衣を脱て剥して扯斷肴を包て懷裡に揣ひ遂に坐を立て主に云
あるハ我ハ今急なる出來たり價ハ此漢子より償へしとて是まで立て跑出と張三
我を又遂退て來るとて打ついて跑出せるバ主大に呆れ是をハ白喫なりと喚で
て追ひける張三ハ更に路を見分けずて一味に走りける所に忽ち地上に索ある
を踏て跌き倒れけれバ忽ち傍より里の童ら七八人走り出で群がり索を捕へると
喚きやゞて張三を押へて云けるハ你酒店の白喫なりければ此さらなる綫を與へ
バ路を借て通しけるに綫を出さんや路を債ひやらくと呵たて累ねて
左右の耳を扯張きけるに元より權に聒る耳なりければ忽ち章絞が為また

乃耳を削しが童等を見て大ひに喜び戯れなりとて雀躍して去
去るかくる処に酒店の主追ひ来て客等の價を償へとて再三言ふに責
立ては張三がいふ某一言の申条なく聊か縁立ども実に今一銖の持合せ無く
我に餘りは彼奴に退られて横へ出めん主が客行跪ふとも一臙が帯する身
して白喫する事やあるとて張三が懐裡に手を揣入て物やあると探るが一條の
紐を見出せり是は張三大に悦び言て云此紐金銭を繋ぎ捲て胯膊にあはれも
こそへんの亡乱薬の紐なり我今質種とせんに縦を解て直綴を抖すに
全身に乱の外一物もなし肉身に附るをのみて今は弓のごとく一具の耳を行者
童等どもに棄たる耳は又高ひとのへども重きものを捧ぐ然島珠は眞に是
瑯玕石の謀に一身の宝なりとへどもを是を保に與て財の典代償とせしめんと恐ひるに
后にてるなと涙をもろくと流しけれども主は又因縁として論ずるに

されども遂に件の烏珠を曲にまで咲を忍びてぞ去るみなり此時張三ハ為かで
茫然として夢裡に游ぶがきるか如く河伯の水を離るる光景にて呟てゐふ
天なる哉命なる哉我亮より事を聞て一時に耳を奪ぎ眼を失ひぬ今ハ首
をれに逆らなぐ修に甘ぜも足あるこそ悦ぶれとて浪々歩々として擲き
ゆく処に落ち物に躓きて倒るに地の上を人の寝たるの其態衣裳は脱去て
昌披に臥膝に臥て左の足を縮右の足を伸て踞地に郷音ぞり近く寄
見れバ李四なりてゝもよき所にて出あふたる我兎の恨をいかでおくべきぞとて李四が
頭を捕るを以て拉砕すに畢て腰にて恰も石偏を抱ぐ如く張三大ひに喜て
いふ係寝惚たるに由て耳門を去られたるに李四が脅を立て此は打乃に忽
嘆嗽寒咯と響て顚て酒肉を吐嗽るに是へ張三かの鼻を物を為を兎
に袖を捲て尾に出るが是は何をか一身のこと張三は我鼻は嗽を向目を失ふのをに

悪ず對ある耳までも亡ひぬよし報よ咲奴が是を奪ひ取らざんバあるべか
らずとそひそか李巳が貼是を帯て懐裡に揣入置巳が片行の耳をとり
く李巳が是の跡よ貼て且ひ常に語て云我耳今ハ缺損なれバ係よ記さる
そとて舌つゞみをうち是を早めて逃去ぬさても又李巳ハ二更の時分よ目を覚
しておきあがれバ月光を照して落草の中よ臥ぬ李巳酔醒て起上
見が憤出てそるひろう思きうなりけれハ奈何と是を摸てみるに
既よ是ハ亡てぐて耳ある李巳大ひよ驚て甚狼狽ておのふ奇なる哉
妙なる哉是總とふ痔医書にありと聞しかども是を度て耳とするす
和漢いまだ其例を究ず推科するよ張三が来りて彼奴給耳と交換せ
そのみゝんは盗人騒すべきかとそ虫に縫させおまえ我がごとく小跑てゆく
正よ是讒小耳を汲く是み貼るといへる類ひなる由し

第六齣

路江身を朝夷奈乃切通よ陥す
艶之佑血を是缺地蔵よ濺ぐ

偖も艶之佑路江ハ金澤を逃出てより息をも績ず足に任せて急ぎ走りけれバ凡五六里を来りしとおもふ處に倭の橘木に青鵯の啼音しけるに足を止めバ木蔭に一軒の憩所ありて山陰よりつたふ筧の清水をとりてこゝに冷水賣をひさぎて販ぎたるが最と陰しき光景なり艶之佑是を見て路江に向って云けるハ今ハや金沢も遠ざかり漸く虎口を脱れぞ先安堵のおもひをなすべし此處よりハ漸々険阻の山路にかゝれバ暫く息を継てまたや路を急がんとて卿ち茶店に立倚て是に腰打かけて休らひけれバやがて店の主茶汲み出て今日ハ暑気強ければ凌ぎがたし陸穂ともに大気つかれ[illegible]さちハ今よ走りいでし[illegible]艶之佑答て云けるハ我々ハ杉本の観音に詣で

そもそも鎌倉まで献ぐる分の主君をなくして去る今日もはや木下越なる処
此所よりも鎌倉鶴が岡まで行程九十二里なり其間ことに険しき山路なれば彼
女房の脚にて鎌倉にまいらんことはや今日は我宿に泊りまするなれど弘明
寺よりも札を納めて杉本へと申す巡礼の同行かくしてこそ此処に泊り申せば明日
同道して其の経所を献ずる処も縁が去るなれども我々は所用の筋ありて路を
急ぎ申せば是非もなし今日鎌倉までおくらんと申すこそ只今うけたまはりてね
ころまで小塩買人ども四五人息杖をつく二人の買人が云ふ我が輩は日毎に世俗
より塩を運びて鎌倉へと商ひ往来する者にて候ふ朝夷奈の切通しを越
るには今かくの如く此月に笹流を汗染を成し身を焚が如くにして参りし
所まで来るに先づ今よりの此処を登りて峠よりいづれも鼻缺地蔵の
前にくるなれども彼処まで女房の御足にては大儀の道のりなるべし

そもそも又行くるには大切通し小切通し切通しとて都合十二ヶ処の難所ありてみなく
鎌倉近とは申すびかくなるその間杉本観音の門前にあるを此
実に一軒の旅籠をなすなれば強いて主が申したるを宿とせんとす今宵は来ぬ
此所も敢て宿の路にて此路の心の中善悪が離かとも又此所に止まる
何となく怖きくぞ思ひて後に言を聞て此我身は心せきまつつかるも
ね旅路なれば少しも早く路を急ぎ申しとのいればまた一人の商人が
云ふ女房はいまだ此所を知りて候ふ哉此所は十二所朝夷奈の切通しと
申て昔より強盗の栖なり今の日も鄙なりとひとふる数限る買人の鼻
缺地蔵は素より山賊に出遭ひしが荷担の漢子の血まぶれの者にて臨
檐を以て件の山賊と立ちまち一所にて又は五人の等輩共も出ひまで
遂にその荷担の漢子をすると切殺せしかば買人は檐子を捨てかろうくの

東かなさわ
西かまくら道

といひてやう〳〵林麓まで迯のがれ命をたすかりしと下の村にて語りしぞやと

そのかたはら侍に又濁酒を飲居る一人の賈人が小さき声にて此の辺ハ物騒なる

先の月も旦那と瞽女ども三人打つれて此切通をこゆるに攻盗賊等俄に

待ぶせやしけん山奥に引ゆき無慙や七八人計にて情なくも

物に追はるゝ根締をはなるゝ衣裳を剥とり赤裸となし行方も知らず

殺しけるとかやその瞽女どもハ山中に漂ひ泣きさけびつゝありけるを木樵を推て

ゆきけるをのちにつれて村落まで送り遣しが其病つきてその中に年の

ころ十六七ばかりの瞽女ハ小眉目もよくて屍骸をもとむるに傷れしとぞ夜ハ

さちかく乃ばかりなれバ今日ハ実に此家に歇て明日同行の人待て一群に

旅まいれ我も嶮路なれバ送り申さんそのあとぞ徒る難を除べしとて云

なさへきをあとべしはし嶮き難なれバとても打連まいれとて独言に賈人にも

向って慇懃に別を告即ち一帯の茶亭を立出忙しく路にかゝりて茶店

を出て此山路の旭影の切通にはいりて其名にあふ切所なれバ急ぎ

ゆかるゝに路嶮しく左右屏風をさしたてるやうな岩壁高さ五丈あまりの巌を

鑿通したる一條の磴路にて礎石を削りなせるがごとく峙ちたり此時五月の下旬

にて天ハ寂晴明なりといへども炎蒸浚るさらでだに路辺ハ元より深窓

に生茂る竹の葉末ハ露すら乾ざる事なれバ腿酸脚軟て

進み登るもおのづから悩しく岩角に躓き爪を破りて鮮血滴る事幾度

つひに其痛に迫り路に倒れて莫大に苦しむ折から従ふ者是を見て

薬を与へんとて懐裡を捜りけるが忽ち驚きて其血止薬を置

懐中に納せしが今ハ心せきて茶店に息ひし所に置忘れを遺

是まで来りたれバ奈何とも詮方なしや是より茶亭が間ハ程も遠きに

今如此にて時を移さバ追人乃後ハ益き来らバこはまたその方昔空し
かくんいざや心を励して進むべしとて路に身を引起し処に遥の彼方より
旅の人くと呼ひて一个の漢子進ミ来る艶に依たひに驚きて立出てこそ
追人の間近く来れるにハいく甚や進退惟谷りとて只呆れてゐる
ぞのりむ追が彼漢子既に近く進ミ来るを見てあはれバ前に追ひ来の
茶店の主なり此漢子言をかまて云るハ客客殿ハ脚軟なれバこそ
遠くハ去りなまだくおもひて路を急ぎ漸々此所まで追着申さば
客客我店の凳の上に忘れし紙布を失脱されしにあるぞやとて即ち
件の紙布を渡しけれバ継之佑ハ紙布を受取て且歓且悦て云
さてしも一旦失ひし物再び身に返る事誠に足下の厚情謝するに言なし
かの志ハ此の身もとや失たるハ世話なれどもおさめたまへとて即ち二帋の銭

我此にて与へしバ此漢子固く辞して云けるハ僕金銭をむさぼる心あらバ仮に
手を紙布を掠て何しに此まで持来らんや客客ハ茶店の主を目し
我ために一時の得意なり別に金銭を受ることやハ更に受ずとて別
を告急にもとの路に立去りけれバ継之佑ハ甚く茶店の主が志を感じて
山家の人ハ質朴なる事よと嘆じけれバ路にも又追人に捕へらるゝよと思ひ
村の外に泊りぞとて一喫を催しつゝ且あれバ此勢ひに進ミ来るべしとて路にハ向ひ
血止薬を附て足痛に力をもちひて跛の行る程にやうやく刻下に至りぬれば
茲に海道の傍の岩尾に大ひなる地蔵を刻鑿てあり則ち是鉄地蔵と
中ハ呼ぶ所なる平なる程ゆるバ路にとは渋して継之佑に
いよいよ路辺の岩に添ふ焼て火のごとくなるにぞ我身ぞや今ハ一歩も足びくに
疲さへ発りて頭暈なきりてあれバさぞくここに安らひ待んや継之佑が

我も又炎熱勢が如くに中れ渇に堪兼ぬ一滴の石清水あらバ唇を潤さんと即ち岩間の凹とある所より水の滴るを身に掬ひて二人が渇を資て傍の木乃根に踞て暫く扇を揮て息を休ひ居たる時しも山子規さきまふ啼く只岩激水の音寂莫く松嵐樹に響のみなり浩ても處に逞の下より一人の馬士二匹の馬に一人の瞽者を乗せて牽来る就中那馬峠の上に進ミ至るを見るに彼瞽子ハ頭より総髪のごとき病瘡ありて両鬢おかしまなる方が麻の袴を穿三弦を脊負て身に挑乃も夏ぶ汝推乃て蚫蝿を拂つ鞴壺によりて宿に添く系の首を縦く睨て来りける処に那苫岩嶮に跌き蹄を跡折しが忽ち彼瞽子ハ鞴壺より滑て墮て地上に驚と打坐ば馬士ある声を叱ひて罵て云かの瘦畜生の大きな躰倒の穢らなるとて策をもって未だ馬を打るを彼瞽子馬士をとゞめて云ふ你る事莫るか今己に極熱れ暑気にあたりし色に指もく驚きしを汝虫おくと死ハ繕る内羅とるそ是孫悩がいたし実悪の馬はよし跳る方とくにぞ自ら謄蹶に意得あって落るよし偶せすば是を落ちし身とやせん我馬師皇が奥義を極て伯楽の妙を得たれバ今武る瘵治て其地よそ乃勅を見たとてやぞ三頭の鍼を出して那る乃眼の旋ゆ刺るが忽ち馬ハ身を撃はるさ嘶ける是ハ馬士身を捐て去我がるに活薬師の乃かくつら世給ふぞやあとめぐるやきうあやと伏弾く中乃是がゑの瞽子が云是ハ大の是柴引の剣といふものなりとそ人もゑまるに亮をうごやす驚く術ハ倚よ此でいさ人でありけるが彼瞽子に向て問ての先生ハ殊に馬療の名人なる躰に落しる

く悪み道る術さへ無心得のあるべき事とこそおそれく此へ彼瞽者ハ言を写て旅人息を居しるやされバ我も息を申さんとて同く木の根に腰打懸ぐ又向て云けるハ旅人ハ独行なるや憩ゐ給ふ答て云同行の女児一人なるが難病に足を痛めぬきるを申出へ此所に労をせさらせて罷有と彼瞽者是を聞て云ふ是ハ路すがら難義の事なり我們外科ハ倉公華佗が術よりも精しく亦陳良甫が旨に通じて女科ハ得さる所なり只今脈を診るにも及ず婦人血症なれど斎ひとつ家伝の妙薬有ならバ是服し給へとて軈て懐中より一粒の丸薬を出て与へけるが瞽者心に田舎瞽者の大言を出てのを覚ざる草薬を衒にやと思ひされバ路次に向て彼同合を是ハ路にてやく其意を知りて只礼のミ述て彼瞽者又ゑんぐ高慢して云けるハ我們万能に達

此ども一心足らで豪家の機嫌を取るを業とし世を渡るなり
くわくの下くにそ乃日を送る中なりさて其容ハ此所ハ毎夜往来しなりや憩ゐ給ふが某ハ旅をのみくて此所に玉匣ハ今夜物でなりかの瞽者瞬きて憩ゐ給ふに向ひて云たわらバ語りて聞せ申さんとて此朝夷奈の切通しと申ハ三郎義秀奉行して切ぬきたる所にて此鼻缺地蔵の前ハ武蔵相模乃国界なり遙に眺れバ東南にハ安房上総の峯々鋸山御眼下に遮り近く見れバ瀬戸例嵜の辺に海人藻を刈り女瀬戸橋が見ゆる人豆のごくに見へつ嶋ハ烏帽子嶌猿嶌裸嶌世嶌其嶌浦ハ六浦葛浦三浦の二子山州ところの木公乃善にて里凡そ見へざる山ハ鎌倉山を始めきて落立れ連山綿々と海へか傾くられ海の流れる里波瀾瀾々

とて涛や空そらや涛ともみへざりけりの西湖瀟湘乃風光直下に彷彿たる如く勝地なり我們此絶景を閑に看るもあらざれども急に驅てあまた我ゟ先に居ならは名所を知るといへる顔なるぞやとなげくと語まなり煙草に依て道を守て矢を包て立るゝハ旅は果下のとき心乃かろき遊人と同伴なさバ路の労をも忘まて高良なるも洒かるべきに其ハ実翁の粮なきハさもや是を申さんとて既に出立しとるを其膳子又止て立るハ貴容志ぞろくまづ此處に名月を待て暑気を避たまへ煙草に依がらふ貴所ハ馬も蒙せをバ緩々と此所に休ミすゞしき風に打くつろぎ給へ我々ハ女ゆゑの軟脚を付ひたどるハもや日闌ねうちに急ぎ申さん補よ此間へ山賊ありて物忩の時下の茶店まで程の中じね彼膳子色を変て何となく大ひに咲てたるへとぞこそハ大ひなる空言なりとの茶店の

此ころハ未煙草といふものあらざれど但作者信の例によりてうかるかなし

主これふかき奴々なる各々我都して己のまゝが家れとぞ先て宿料を所めもせんが為の何条恐れる事あらんやいまだ日もたかきれバまづ烟草を喫し給へとて頓て火嚢より火鑽鍥火燧石を把出し火口に切火を点て倡とてすゝめけれバ煙草に依ゆゑ病を忘ぞて燧火を煙筒に受て一道の烟を吹きさむその膳子咲して云ふ我らハ朝之都と申て按摩を渡く三絃の妙手なれバ煙草の返礼に一曲うたひて慰め申さんとてやがて脊負し三絃をとり出て倒子ならかに咲る聲で鄙唱をぞ謳る其唄よいふ

相思惟一葉　継曰直千金
自買為君寝　可憐不断心

此時煙草に依路にハ烟草を喫ほど々の心をなく向を見るに九折の路を流るゝの下なる截岸の下に大ひなる松ありて松乃蔭に人影現まし呉顔

こなたが窺ひ望みけれバ路の邊を見て指ておりけるハ何さるゝな彼處に人
かのやうに其三我々を見ハ必定盗賊なりと思ひて逃給ふぞやと怕れたるふみな
大ひに危みて尚を動静を望み居る處に遙に向乃方より一个の漢子
赤條々にて雨色土のごとく喘氣吁々して跑来りけるが已に介乃旁に近く至
り進み兼て揖拍の禮を施し此光景を看て居るハ此切通の上にハ白昼
にも賊ありて旅客を劫ふと聞及びし故老ざれ我々も見るごとくにて留て褌褓
也故に恐れて此路を過る你我々が衣裳を剥んとするゝんか乃漢子
是が為に吁ともやともえて再生る心地すれとゞて大息を吻と継ぎ禮を施
此辯を見て又問てありけるハ你ハ去往て何由へ我々を怕れきやの漢子が申す
我ハ賊ならぬぞ却て各々が賊なりと疑ひ大に怕れ中ぬ禮を施が申你
何ゆゑ赤條々にてまづ先ぞ其の處より来るぞと問へバ漢子ハ甚しく息をつき
聲を振ひて答けるハ某ハ本房州の住人里見家の士なりしが由緣ありて流浪し今
鎌倉に至て遊ばんと欲し既に此路を過る所に一里ばかり後の大樟の茂みの
下まで凡十人ばかりの山賊等ありて圍まれ遂に代思顧乃郎從等二人武て
討死をなせしバ某叶ずとおもひて逃んと計策を施し衣服刀を投出しつく
無二無三に迯しバ賊等ハ遂に後を逐来らざりしかども武士たるべきもの
如く赤條々にて命ばかりを助かりと逃のび来りしなり各々も猶餘ある
にあらば前に往べきハ無用なりと疾下の方へ去り給へとて又後ざまに見て
してゆかんと下乃方に去けるが扨路に禮を施ハ大ひに驚きさハいかが
せんと狼狽周章るものに彼馬士傍の木の枝を折てもち執てのべて云
些少しも怕るゝ事なし我ハ卅一本の策を以て攻盗等を往来の
妨をなさバ打殺して通らんと最勇み競ひ進むに彼膳子甘大ひに

勇ま同く杖を引さ勒て去潔き言やかな我をまたるごろの杖ぞふまゝ二八猿
等を賺撞ふ𛀁倒氏ハ縦不を紙ん東ハ明者よりも最速女鵜ハま川我
るよ豪まりせて路をあらさんいざ疾もそ路江が多我撮ると見ゆが忽
ち髪と拖て押倒せバ彼馬士その侮ゝ馬の轡取りて路江ゞにふ衛ませ又
馬の罥索を拿て猝もへ鮅ゞ術ハ免れ兄て夫ひよ躍ハ死屍居よ合と玉坐
けるがまや曲者ござんなれと飛ふ刃揩て兆よるゝとる所を被る士撲地と
踢る鮅ゞ術踢らせて横倒よ仆まする所よ足を以踏つまえひゐ附て云
ふるハ我ハ卅海道の馬士なりといへども實ハ互敖饗馬なり孫ゐるぞや我
當惑乃謀よ中まりとて哈々と打笑ふ路江ハ鮅ゞ術ぶ脚下ゐ踏ゑを扣
るるふ然もく拔んとのみと紫甲よ身をも世じミ゛卅時かの瞎子双睛
[illegible]

我ハ巴吉人と見せて國々を遍歴なし知勇扶稱の強盗なり今汝が
ふ烟草を與へたるハ元より我謀なり今喫する鑽燧の石ハ丑蛮國より
渡る所の大毒石なれバ燧石を以一度煙草の烟を服する者ハ暫時の内
ふ毒気五臓ふ巡て四足麻木て身を動く事ならず又忽地よ唖と成
るぞやくその効なんぜんまやといまだいひもをはらざるに彼る士只一脚よ小膳と
踢起ハ鮅ゝ術一声啊呜と叫で口より鮮血滾々と流て七転八倒して
苦くよ從ふりの瞎子は光景を見て心地よげ如嬰咲て暗圖の笛を
鳴るが忽ち合よ響くとの音と均しく何処よりか伙伴の赤條条
漢子を乞じめ射狼のごとき部賊等八九人ぞろぞろとあらはれ出が忽ち路江
が身を馬上よ舁のせ鞍壷よ繋衆一齊よ吐と造化好と叫んで急ぎ
るを追さて徑路の方へぞ引入る此時恐く佐ハおのまらかくせの中ぞせと

第67946號 受入 昭和36.3.14

喰んとすれバ巣を知るや否や總て五體癱麻て一寸も動ず偏に木偶
のごとくなりしバ実にんちゆき次第にて此巻を鈎に釁を切て落るぞうつ
看るく強盗どもハぞんぶんに身を急せて山深く立入るに然栽路ハ崇
る上に鄕らせて身も動れぞ泣叫るもうかくて唯須を迴れバ熊之佑
尚もと搔迴処に折洌なる路にハ冉々に去る事くなる儘に先に熊之佑が
何とかんとのつくとあふてにより血ながれて紅に染る迄が次第にえきくう
ふきさひて甚かくこち幽に流てとくぞ路にふてかうくえて侭よたと
熊之佑がかくこちちいさくなく後にへその影さえとめんとと路にたそえて
さるを泣叫ねる所に何前の谿間より蒸生る一道の山氣湧おこり露ぬ
かく熊之佑が状を益迴暗々朦朧として遂にその去向を見失ひける
[illegible]物語前編巻之二終